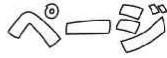


# ホーム



## 研究者と図書館司書の間

### －レファレンス業務を通して－

閲覧係 渡辺 直土

レファレンスとは何であろうか。当然一言で言い表せるようなものではなく、古くから論争的とされてきた問題であり、この小稿で何らかの結論が出せるほどの力量を筆者が持ちあわせているわけでもない。ひとまず『最新 図書館用語大辞典』（2004年 柏書房）を参照すると、「レファレンス」の項には「図書館利用者が学習・研究・調査等のために必要な資料および情報を求めた場合に、図書館員が図書館の資料と機能を活用して資料の検索を援助し、資料を提供し、あるいは回答を与えるなど、利用者と資料を結び付ける業務で、現代のあらゆる館種の図書館において直接サービスを形成する重要な要素である」とある。また、「レファレンスサービス」の項では「情報を求めてきた個々の利用者に対して、図書館員によって提供される人的援助の形式をとるサービスとこの活動を効果的に行うために必要な資料を整備・作成することをいう」と述べられている。実際に中央図書館4Fのレファレンスカウンターで提供しているサービスは多岐にわたり、初歩的な利用指導や所蔵調査に限らず、先生方や大学院生の方などからは詳細な事実認定についての依頼を受けることも少なくない。これまでささやかながらも研究活動に従事してきた筆者の経験に照らしあわせると、特に4Fカウンターで業務を開始した当初は戸惑いを覚えたものである。「これは研究ではないのか？」と。

このような利用者の多様な依頼に対して、レファレンス担当者の一人一人の知識の量は限られており、あらゆる分野に精通するということは不可能である。そこで担当者それぞれが情報を共有し、全体の流れを把握するこ

とでレファレンスカウンターという組織としての能力の底上げを図る必要が出てくるだろう。他方で、研究者の側では「（試行錯誤しながら）必要な資料を探すのも研究のうち」という考え方が一般論として存在しており、筆者も大学でそのように教えられてきた。そこには図書館のレファレンスカウンターで専門的な調査も受け付けているという認識は希薄であり、実際に筆者の知人の研究者に4Fカウンターでの業務内容の一端を紹介すると「図書館でそこまでするのか」といった反応が返ってきたこともある。確かに専門的な調査を依頼する利用者も存在するが、全体的に見た場合にその割合は大きくないだろう。すなわちここでレファレンスとは何か、研究とは何か、あるいはレファレンスと研究の境界線はどこかという問題が生じてくる。

レファレンスの範囲をめぐるのは周知のようにアメリカでも「レファレンス機能論争」として長年にわたり議論されてきた。すなわちレファレンスサービスの二本柱である利用案内（指導）と情報（源）提供のうち、どちらに重点をおくかによってレファレンスサービスのとらえ方が変わってくる。前者を重視する考え方を保守（conservative）論または最小（minimum）論、後者を重視するものを自由（liberal；ideal）論あるいは最大（maximum）論、その間を中庸（moderate）論、または中間（middling）論として論争が展開されてきたが、実際のレファレンス業務においては回答禁止事項などに配慮しながら利用者の要望を汲みとり、臨機応変に対応するしかないというのが率直な感想である。

ただ、ここで懸念されるのは図書館司書と研究者の間に存在する「断絶」とでもいう状態である。研究者は自らの論文の価値を高めるために必要な一次・二次資料を探さべく、日夜奮闘している。そこから得られた経験によって資料探索のノウハウも研究者間では蓄

積されてきている。他方で、図書館司書の側もレファレンス業務を効率化し、情報を共有し、サービスを向上させるための工夫を凝らしている。各種の参考図書やデータベース、電子ジャーナルなどを利用したレファレンスについてもノウハウを蓄積してきている。しかし、上述の知人の反応にもあるように、全体的に研究者の中では図書館のレファレンスサービスに対する認識は高くはなく、図書館側のレファレンスサービスに関する周知も十分とは言えない可能性もある。それゆえ、研究者の持つノウハウが図書館司書に提供されることは少なく、その逆もまた然りである。もし、双方の経験が共有できるような関係を構築できれば、それぞれの資料探索をより効率的に進めることができるのではないだろうか。

レファレンスサービスの周知という点に関連していうならば、中央図書館4Fレファレンスカウンターでは特徴的なレファレンス事例について調査の流れや提供した資料について記録して残し、その一部を国立国会図書館（NDL）のレファレンス協同データベースに登録している。公開中の事例に対する一般からのアクセス数も15,000件を超え（2006年9月23日現在）、その意義は小さくないであろう。そして、個々の事例を少しずつ蓄積していくことで、量を質に転化させることができ、図書館利用者の信頼を獲得することができるのではないかと考えている。

（参考文献）

長沢雅男 『レファレンスサービス 図書館における情報サービス』（1995年 丸善）

“データベース体験講座”ができるまで

閲覧係 加藤 習子

近畿大学中央図書館では、年に2回、春と秋にデータベース体験講座を開催しています。今年度の春に開催した講座は、「図書・雑誌の探し方」「雑誌論文の探し方」「新聞記事の探し方」「法律関係情報(初級)(中級)」の4本立てで、各2～5回ずつ行いました。このデータベース体験講座を開催するまでには長い道のりがあります。

「図書館ツアー」や「データベース体験講座」などの計画、開催を中心となり行なっている利用者教育ワーキンググループなるものがあります。今年度、私はこの利用者教育ワーキンググループに参加させていただきました。図書館経験も浅く、あまり自信がないのですが、“利用者のためには何ができるのか”ということに常に考え仕事をしているので、少しでも利用者に満足していただけるものになればと思っています。ワーキンググループ担当で何度も集まり、今年度のデータベース体験講座の方針、講座の内容、広報、資料作成等を話し合います。日程も図書館側の都合ではなく、学生の方が利用しやすい日、時間を皆でカレンダーとにらめっこしながら決定します。昨年度と大きく違う点は、以前は「データベース講習会」という名称でしたが、データベースの使い方を説明する講座内容よりも利用者データベースを実際に使って体験してもらうという目的を強調するため、「データベース体験講座」と変更しました。また、事前申し込み制をやめ、「体験講座ウィーク」と銘打って月曜日から土曜日まで連続で開催し、空いている時間に気軽に参加できるようにしました。このように、いろいろと細かいところまで話し合っただけで骨組みが出来上がっていきます。

さらに、4つのデータベース体験講座につ